

## 巻頭言

## 断層映像の普及と研究会の発展的変革

有水 昇

執筆者の急事情のために急遽予定変更、小生に巻頭言への執筆が回ってきた。これは、16年前に第10回断層撮影法研究会を千葉市で主催させて頂いた関係による。本研究会の発展方向については、今までに幾度となく論じられた所であるが、ここでも同様の論議を踏襲したい。

本研究会は昭和42年の創設であるから、今年で早や30歳を迎える。本研究会の歴史そのものが恰も放射線医学の進歩を率直に物語ってきた。創設当時は、平面断層は必要症例に実施するいわゆる特殊撮影の時代であり、その時代は本断層撮影研究会のアイデンティティも高かった。現今では平面断層撮影は微々たる件数に落ち、隔世の感を禁じ得ない。

断層映像は、この30年間にエックス線・核医学・磁気共鳴・超音波等の全画像診断において主役にまで発展し、現今ではルーチンの診断画像となっている。このために断層診断は膨大な診断領域を抱え、その研究・発表の場は本断層映像研究会の規模では到底に対処し切れるものではない。そのために、本研究会を解消して親学会である日本医学放射線学会の診断部門として再発展するのが望ましいとする意見は頻繁に云われてきた。この巻頭言のコラムでも、この意見はたびたび論ぜられた。ここでは、これには反論しない。現在の問題点は、本研究会再出発の方向性であり、その主なもの3つを取り上げたい。

先ず第一の方法としては、すでに頻繁に論じられたように、日本医学放射線学会の診断部会として再出発することである。反対者も少なく、最も安易な方法と云える。

第二の方法としては、単独学会に発展することであ

る。即ち、多くの賛同者を募って日本医学放射線学会のサテライト学会としての放射線診断学会(仮称)を創設し、その中で大きく発展することである。しかし、これには日本医学放射線学会員に多くのコンセンサスを求める必要がある。勿論、反対する向きも多いと考えられるので、創始者には多大の努力を厭わない不転退の一大決意を堅持する必要がある。しかし、発展性は高い。

第三の方法は、30年前の本研究会創設時の「断層映像方法を研究する会」に立ち戻ることである。これは研究会の規模縮小であり、安易の再出発とも受け取られよう。この場合には、断層映像機器における医用工学、とくに電子工学・機械工学・情報工学等、の水準の高さと発展とは注目する必要がある。創設からの10数年間では、確かに放射線科医単独でも独創性があれば、断層撮影方法に関する研究はかなりの所まで行けた。しかし、時代は変わり現今では、放射線科医にとっては、それ相応の努力と独創性ばかりでなく医用工学に関する専門的な学識がなければ追従はおぼつかない。それとともに、理工学者、とくに工学方面の協力は必須である。逆に診断機器の研究・機器の進歩には、放射線科医の関与が不可欠であるから、両者の共同研究の場としての研究会発足の意義と必要性は高い。

本研究会がこれまでに断層映像診断の発展に果たした功績は大きい。しかし、画像医学の進歩によって本研究会自身にとっても発展的変革は最早避けて通れるものではない。どのような改革を選択するか、会員の英知と決断に期待する所である。

(都立医療技術短期大学学長)